

岩倉使節団

1. 岩倉使節団とは

(1) 概要

明治4年（1871年）11月12日（陽暦では12月23日）、右大臣岩倉具視を特命全権大使とする欧米使節団が、横浜を出発し、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツを始め、欧米12カ国を訪問した。日本のかたちと針路を決めることに役立った。

(2) 使節団の派遣が企画された経緯

使節団の派遣は、誰が企画し、実現したのか。それは、大隈重信の構想によると考えられる。ただし、大隈がその構想を持った経緯については、以下の流れが背景にある。

1859年、オランダ系アメリカ人のフルベッキが宣教師として来日、しかし、当時は禁教下で、長崎で英語や実学を教えていた。フルベッキは、工学技術の実務的知識を大変豊富に持っていたため、佐賀藩の弘道館に招かれ、その教え子に、大隈重信、副島種臣などがいたのである。

そのフルベッキは、西洋の文明を学ぶには俊秀を選んで海外に派遣し、直接見た方が良い、とアドバイスした。

明治維新後、佐賀藩の俊才は中央に出て活躍することになった。フルベッキも東京に招かれ、開成学校の教頭になった。そして、中央政府の政治顧問的な役割を果たすことになった。そうした中、大隈の諮問に答えて、フルベッキは使節団派遣の企画書を明治2年に作成した。

それには「天皇および国民が、その知性、活動力、高い人格に十分な信頼が置ける人物」をその使節の代表として送り出すことの重要性が強調されていた。また、その場合、予測される外国側からの要求を始め、使節の目的・組織・人員・調査方法・旅程などが具体的に述べられていた。

大隈はこの意見書を得たものの、使節派遣は諸般の事情からなお時期尚早として、秘蔵するにとどまっていた。

一方、伊藤博文は明治3年に貨幣並びに財政制度を調査のためアメリカに渡っていたが、現地での国際情勢に通じるに伴い、列国との間で交わされた当時の条約が、わが国にとって極めて不利であることを痛感していた。そして、明治4年、正式の使節を派遣して、いろいろ調査すべきとの意見書を提出した。

明治4年に廃藩置県の成功に伴って使節派遣の構想が具体化してくると、フルベッキの企画書のことがクローズアップされてきた。そして、特命全権大使派遣という形が急速に出来上がったのである。

（３）使節団の参加者

参加者は、特命全権大使の岩倉具視（47 歳）、副使に木戸孝允（39 歳）、大蔵卿の大久保利通（42 歳）、その他、伊藤博文（31 歳）、実務担当者約 20 名（外交経験があり英仏語を操る旧幕臣など）。

大使本体 22 名、各省派遣組 26 名、計 48 名。

さらに、60 人近くの留学生（中江兆民、金子堅太郎、団琢磨などに加え、5 人の女性）。

残留した政府要人は、参議の西郷隆盛（43 歳）、太政大臣三条実美（35 歳）、参議の大隈重信（34 歳）、参議板垣退助（35 歳）など。

（４）女性の留学生

吉益阿亮（16 歳）…父は元幕臣、当時東京府の外務大録

上田 悌（16 歳）…父は新潟県士族、外務中録

山川捨松（12 歳）…父は元会津藩家老、兄健次郎はコネチカットに留学

永井 繁（9 歳）…後に三井物産総師となる益田孝の実妹

津田 梅（8 歳）…父は元佐倉藩士で当時開拓使の農事吏員

女性の留学生派遣は、薩摩出身の海外留学経験者の黒田清隆、森有礼の建言書による。

つまり欧米では母親に教養が備わっているから、幼児の段階から母の手で教育を施すことができる。だから、日本はまず、これから母となる少女を選んで欧米の進んだ教育を受けさせるべきだ、という考え方がその内容である。

5 人は、最初、日本弁務使館書記官宅で英語勉強のため居住していたが、吉益、上田は、体調を崩し、72 年 10 月に帰国した。

山川捨松は、日本人女性最初のアメリカ大学卒。後の大山巖夫人、鹿鳴館の花形。

津田梅は、それから 11 年学んだ。帰国後、再度アメリカに渡り、大学入学を果たし、生物学を専攻。学者の道を勧められるが、断り、帰国。津田塾大学を創設。

その頃、新島襄がアーモスト大学を卒業、神学校に通っていたが、メンバーが新島の実在を知って驚き、通訳として同行を勧誘、新島は、ヨーロッパに同行することになった。

新島は、その後、再びアメリカに戻り、神学校に復学した。

渡航組と残留組の間で、12 カ条の約束という取り決めが行われ、留守政府が勝手なことをしないよう歯止めを行った。

（５）使節団の目的

① 新生天皇国家に伴う各国元首への挨拶回り

- ② 条約改正の予備交渉…治外法権の撤廃、関税自主権の確保について相手国の意向を探る
- ③ 西欧列強諸国の文明探索

2. 岩倉使節団

(1) 出航から帰国までの 632 日

- 1871 年（明治 4 年） 11 月 12 日（陽暦 12 月 23 日）、総勢 100 名余で横浜出航。
 12 月 6 日（1872 年 1 月 15 日）、サンフランシスコ着。
 12 月 14 日（1 月 23 日）、歓迎会で伊藤が英語でスピーチ。
 （日の丸演説）
- 1872 年（明治 5 年） 1 月 21 日（2 月 29 日）、大陸横断列道でワシントン着。
 2 月 3 日、条約改正交渉を開始。
 2 月 12 日、大久保・伊藤、緊急帰国（日本着 3 月 24 日）
 6 月 17 日、大久保・伊藤、ワシントン帰着（日本発 5 月 17 日）
 7 月 3 日（8 月 6 日）、ボストンを発つ。
 7 月 13 日、英国リバプールに入港。翌朝、ロンドン着。
 女王避暑中のため謁見延期。この間、諸機関見学。
 8 月 27 日、パークスの案内でスコットランドへ。グラスゴー、エディンバラ、ニューカッスルなどを巡る。
 11 月 5 日（12 月 5 日）、ヴィクトリア女王と謁見。
 11 月 16 日（12 月 16 日）、ロンドンを発ち、フランスへ。
- 1873 年（明治 6 年） 2 月 17 日、パリを発ち、ベルギーへ。
 3 月 9 日、エッセン経由後、ベルリン着。
 3 月 15 日、ビスマルクの招宴に臨む。
 3 月 28 日、大久保利通、帰国の途へ（横浜着、5 月 26 日）
 3 月 30 日、ロシアの首都、サンクトペテルブルグ着。
 4 月 16 日、木戸孝允、帰国の途へ（横浜着 7 月 23 日）。
 4 月 24 日、デンマークを経由し、スウェーデン着。
 5 月 9 日、アルプスを越え、イタリアへ。フィレンツェ着。
 その後、ローマ、ナポリ、ヴェネチアへ。
 6 月 3 日、ウィーン着。万国博覧会開催中。
 6 月 29 日、スイス国内巡遊の末、ジュネーブ着。
 7 月 9 日、日本政府より帰国命令の電信着く。スペイン、ポルトガル訪問の予定中止。
 7 月 20 日、マルセイユ発。
 9 月 13 日、アジア各地寄港の後、横浜港に帰着。
 （注） 日付は、明治 5 年まで陰暦、明治 6 年以降は陽暦

（２）最初の国はアメリカ

一行は、アメリカの太平洋郵船会社（パシフィック・メール・スチームシップ・カンパニー）の「アメリカ号」で横浜を出帆。4500 トンの帆走を兼ねた外輪船で、23 日間でサンフランシスコに到着。

使節団の中には、すでに外国を知っている者もいたが、ほとんどの人にとって最初の異国で、「西洋文明」の最初の洗礼を受けた。大使一行の案内されたホテルは中心街のグランドホテル。玄関からロビーに入ると磨き上げられた大理石の床に驚いた。

（３）晩餐会

サンフランシスコで市による大歓迎晩さん会開催。

参加者は知事、前知事、市長を始め各界の名士約 300 人。

伊藤の英語によるスピーチ、「日の丸演説」は大好評、万雷の拍手

「わが使節の最大の目的は、文明のあらゆる側面について勉強すること。貴国は科学技術の採用によって、祖先が数年を要したことを数日の間に成し遂げた。わが国も寸暇を惜しまず文明の知識を取り入れ、急速に発展せんと切望するもの」

サンフランシスコから一行は、大陸横断鉄道で目的地のワシントンへ。当時大陸横断鉄道で7昼夜かかったが、一行が旅行したのは真冬であり、ロッキー山脈の手前のソルトレイクシティで足止めされ、18 日間も滞在することになり、結局ワシントンについたのは横浜を出航して 70 日目。

当時の大統領はグラント将軍で、南北戦争の英雄だった。しかし、条約交渉でつまずいた。

（４）条約改正交渉

アメリカ側から「天皇陛下の委任状」が外交の慣例で必要と言われ、急遽、大久保と伊藤帰国。一行は、2 人が戻るまでそのまま滞在。しかし、2 人は戻ったものの、委任状は「使ってはならない」との日本政府側の意向のため、条約交渉は中止となった。

（５）使節団はアメリカ人にどのように映ったか

礼儀作法の点では、アメリカ人は日本人に教えられることが多かろう。彼らは上品に礼儀正しく会釈をし、何の苦もなく紳士的な敬意を持って人を遇する。個人の客間でも公の歓迎会でもまた街頭でも、彼らの振る舞いは極めて高く評価される。

（６）女子留学生に対する評価

いま、わが国を訪れた日本の女性たちは、平均的に上流階級を代表する女性たちであり、

もちろん独身で結婚もしていない。しとやかで上品な立ち振る舞いのため、彼女たちはアメリカ人の間で多くの友人を得た。彼女たちと親交を結んだアメリカ人は皆、彼女たちがみなとても魅力的だと明言している。彼女たちはとても活発でキビキビしているが、その物腰は人に頼らぬ堂々としたものである。

（7）中国人との比較……使節団から少し遡るが、1870 年の新聞記事

日本はいち早く自らの意志で外国に優秀な人材を駐在使節として送り出した。

中国人は人間の格が低すぎて、占めている地位相応の威厳を示すことができない人物を外国に派遣したが、日本人はこれと異なり、立派な経歴を持ち、最近まで重要な職務に就いていた人物を選んでいる。

中国の使節団が、有益な結果を得るのに我々の眼前で完全に失敗している。この二つの国民の相違は、日本人の進歩への欲求を信じる方が正しいことを示している。

飽きるほど世界を旅した人は、「私はいたるところに旅したが、失望しないで済んだのは日本だけだ」と言っている。

（8）一行が驚いたアメリカの「女尊男卑」

例えば夫婦の交際のあり方を見ていると、まるで日本で嫁が舅や姑に仕えるように、子が父母に仕えるように、夫が妻に仕えているのに驚いた。男女が船や車に乗る時には男性に方が立って席を譲り、婦人はお辞儀もしないでその席に座る。それをごく当たり前のようにしている。

3. 欧州各国へ

（1）大英帝国

1872 年 7 月 3 日にボストンを発ち、リバプールに 10 日後、到着した。

イギリスでは、世界最先端の文明の諸相を学び、ヴィクトリア女王に拝謁することが一番の眼目だったが、アメリカでの滞在を延長したため、イギリス到着が遅れ、女王はすでにスコットランドに避暑に出かけた後であった。そこで、一行は、女王の戻りを待つ間、各所の見学、視察に精を出した。

最初にリバプールへ行き、造船所、紡績工場、倉庫などを見学、特に造船所では、大きな船ができて行くプロセスを見学、分業とはどういうものか視察した。

また、クルーでは鉄道の車両工場を見学、これらが多く輸出されることを知った。

続いてマンチェスターで紡績工場を見学、イギリスの富の源泉がどこにあるかを見抜いた。さらに、イギリスで一行が特に興味を持ったのは政治制度、産業貿易のからくりだった。政治制度は、議会、王政、貴族制が一体となり、うまくバランスされていた。

また、イギリスは、アメリカと違って、国のサイズ、欧州から離れた島国という点で日本と似た面がある。それにもかかわらず、富については大変な格差がついている。それは、工

業と貿易だということが分かり、多いに参考となったという。

（２）イギリスでの日本人の評価……1872年8月20日のタイムズ紙より

中国は評価対象としてあまりにも広大すぎる。一方、日本は我々の評価可能範囲に収まっているし、イギリス人にとっては、とりわけ興味深い存在である。日本も島国大国であり、イギリスよりかなり大きい。この東洋のイギリスが、並外れた政治的成功のもとで統一されたことは確かである。きわめて強力な政府と練り上げられた文明、そして端的に言えば、高度に発展した体制が日本に存在していたことは紛れもない事実だった。

日本人には、際立った知的並びに道徳的勇気が備わっているように見える。日本人の性格は、ヨーロッパにおけるある種のもっとも質の高い同義に匹敵するものがある。

日本国民は、われわれの科学知識と機械技術を、十分に理解する能力のあることを自ら証明した。岩倉について、「優れた知性と教養の人物として、日本駐在の各国代表の間で衆目が一致している」。

（３）フランス

パリでは、ナポレオンの墓、鉱山学校、天文台、博物館、図書館、フランス銀行、公設質屋、下水道、市場などを見学したほか、手工芸的なゴブラン織、セーブルの陶器、チョコレートや香水工場なども見学した。

政治形態は共和制だが、革命以来、政体は安定せず、80年間に6回も王政と共和制を繰り返したことを知り、かえって、フランス側から日本の「万世一系の天皇制」を評価された。

（４）洋装にがっかりしたフランス人

大使以下全員がロンドンで仕立てた礼服を着てチエール大統領に謁見した。日本側としては得意な場面だったが、フランス側はがっかりした。派手な色彩の絹の着物、円錐形の細い藁で編んだ帽子といった民族衣装を期待していたからだ。

（５）ベルギー

ヨーロッパでも最も早く鉄道網を引いた国で、小なりといえど大国の間にあって独立を全うし、富国を維持しており、使節団はその原因を「国民ひとりひとりの自主独立の気概と勤勉にある」と理解した。

（６）オランダ

国土は湿地のような国土で石炭も木材もなく、その資源の貧しさに強烈な印象を抱く。にも関わらず、独立と富裕を保っているのは、勤勉で辛抱強い国民性であり、積極的に海外へ出て貿易に勤めた進取の精神にあると分かった。

(7) ドイツ

オランダに 12 日ほど滞在した後、3 月 7 日、ドイツに向かった。ベルリンに入る前に工業都市エッセンを訪問。ドイツを代表する鉄鋼と軍事産業の総合会社クルップを見学。その後、首都ベルリンに入る。

ドイツは数年前まで 20 いくつかの領邦国家に分かれていたのをプロイセン主導で統一。一行はその立役者たる皇帝ウイヘルム一世と宰相ビスマルクに会う。

ドイツは当時の日本と類似点があった。人口は 2700 万人（日本は当時 3500 万人）、国家統一でも産業革命の面でも英仏に後れを取り、オーストリア、ロシア、フランスという大国に囲まれながら、ついに統一を果たし、英仏などの大国と優に匹敵するだけの国家に仕立て上げていた。

ビスマルクは晩さん会で、親しくスピーチした。「当今、世界はみな親睦礼儀を持って交っているように見えるが、それは全く表面上のことで、内面では、大が小を侮るというのが実情である」

使節団の首脳は、このスピーチに大いに感銘を受けた。日本もまた、産業革命に後れを取り、北からロシア、東からアメリカ、西から英仏などの圧力を受けていて、いかにしてそれらと並立する独立国家をいかに作るかが緊急の課題だったからだ。

強国がひしめく当時のヨーロッパで、ビスマルクは、弱小国プロイセンを率いて軍事力を強化し、ドイツ帝国を築いたが、その過程で、オーストリア、フランスにも勝利し、鉄血宰相と呼ばれたが、言うまでもなく、当時日本が置かれていた立場は、プロイセンと大いに通じるところがあり、大国の圧力を受ける中で、遅れて近代化を進めなければならない国だったからである。

(8) 木戸、大久保に帰国命令

この時、留守政府の三条太政大臣から、木戸、大久保に帰国命令が来た。国内にいろいろ難題が生じ、対応しきれなくなったからである。そこで、大久保は帰国するが、木戸は応ぜず、自分はロシアを見て帰国したいと強く希望した。

結局、大久保だけ、ここから帰国することになった。

(9) ロシア

使節団はアレクサンドル 2 世に謁見し、造船場、鉱山学校、兵器工場などを見学。

印象は、少数の貴族だけが豪勢奢侈を誇り、大多数の人は奴隷に近いような貧しい生活を儀されている現状を観察した。

「欧州で最も雄なるは、英、仏、であり、最も不開なるは露」と久米は印象を書いている。

(10) 北欧の印象

デンマークのコペンハーゲンで、皇帝クリスチャン 9 世に謁見、5 日間滞在し、博物館、電

信会社、軍艦製造所を見学。次のスウェーデンのストックホルムは、水上に浮かんだような美しい街だった。王宮で国王グスタフ1世に謁見、夜は晩さん会、舞踏会に出席。海軍所、博物館、物産展覧所、鉄鋼工場を見学。鉄鋼工場では極めて良質な鉄が作られている様子を見学した。

(11) イタリア

アルプスを超え、フィレンツェでイタリア側の出迎えを受け、一泊後、ローマへ向かう。ローマは一行にとって、驚きの一つだった。まるで200年の遺跡に迷い込んだような趣があった。一方、街にはホコリが散乱し、乞食の姿が目立った。

一行は、エマニエル2世に謁見し、1週間滞在し、サンピエトロ寺院、フォロロマーノ、コロシウム、カラカラ浴場、サン・タンジェロ城、パンテオン、カタコムベなどを見学。

(12) オーストリア

皇帝フランツ・ヨーゼフに謁見、たまたま開催されていた万国博覧会を見物。世界各国からの産物、機械、製品が凜冽され、一行は、この博覧会に巡り合えたことを喜んだ。

(13) スイス

ミュンヘン経由でスイスに入る。この小さな山国が山水の美を資源として他国からも客を集め、ホテル、レストラン、馬車、遊覧船、登山鉄道まで設けて、観光を産業として成り立たせていることを知った。

4. 帰国へ

スイスを最後に、一行は帰国することになった。

7月15日、ジュネーブを発ち、途中リオンに2泊して18日にマルセイユに到着。そして7月20日、フランス郵船のアウア号に乗ってマルセイユに寄港した後、地中海に出た。マルタ島をよぎってポートサイドに寄港、その後、スエズ運河を航行し、8月1日、アデンに寄港。

その後、マラッカ海峡、シンガポールに寄港。ここはコレラが流行しており、上陸を断念してサイゴンへ。その後、香港、上海と寄港。4日、アメリカのゴルチェン号に乗船し、日本に向かう。9月6日、長崎近海に達し、9月13日、横浜に到着した。

横浜では国内の評価を反映するように、2年前の華やかな出航風景とは対照的な侘しい出迎えぶりだったという。

1年9か月ぶりに見る日本の風光は美しかった。南の島々、セイロン、シンガポール、香港も美しいと思ったけれども、とてもその比ではなかったという。

5. 使節団は訪問でどのような印象を持ったか

(1) 列強の脅威

アメリカは、南北戦争が終わってまだ5年しか経っていなかった。アメリカは国内の未開拓の土地がたくさんあり、日本にまで食指を伸ばそうとする気力も余力もなかった。そのため、当時の日米関係は利害の衝突を生むような要素はまだなかった。

英国は、日本に似て、ヨーロッパ大陸から海峡を隔てた島国だけに、他国から干渉を受ける度合いが小さく、関心はもっぱら海外の植民地確保に向いていた。しかし、それも貿易の利益が主であり、しかも極東の日本の場合は、東からアメリカの手が伸びてきており、いわばその接点でもあり、露骨なこととはできない状況だった。

(2) 宗教について

彼らは行く先々で「なぜ日本はキリスト教を禁止しているのか。そんな国と対等に付き合えない。早くキリスト教を認めろ」と迫られたこともあった。

しかし、日本は日本の考え方があった。司法省の調査理事官の佐々木高行は、ソルトレイクシティでミンスロウというアメリカ人に会い、このように答えた「16世紀にポルトガル人やスペイン人がやって来て、キリスト教を広めようとしたが、これが害毒を流したので、人民保護のために幕府が禁じたのだ。その後文明の進歩により、かつてのキリスト教の悪弊ものぞかれたというがそれを知らず、その弊害を恐れてオランダとだけ付き合い合ってきたのだ」と答えた。

すると彼は「それはもっともだ。私の考えでは、日本は、礼儀作法においてはもうすでに十分文明国なのだから、今更他国の宗教でもなかろう。それに科学的学問が進んできた今日では、もう昔ながらの宗教ははやらない」といった。

このように答えたことで、日本人の宗教に関する考え方が、理解され始めたようだ。

(3) 進歩とは何か

当時の日本は、「花鳥風月」の世界に安住していて、花を見れば和歌・俳句を作り、鳥を見れば絵筆を取るという世界にいたのではないかと。進歩とは古いものを捨てること、旧来のものを放棄することが進歩と考える人が多かった。

しかしヨーロッパ文明を見た彼らは、それが間違っていたことが分かった。文明というのは先人の知恵に新たなものを重ねていくことで生じることなのだ。古い知識を放棄してはならない。パリの図書館で膨大な蔵書を見学し、そのことに気づいたのである。

この格差の現実気づいた一行は、ここの根本から始めなくてはしょうもない、と痛感したようだ。

(4) ロシアに対する評価

サンクトベルクに行ってみると、ロシアは決して世界の最強の国ではないと知った。国力というのは軍事力だけでなく、国民の民度や経済力によるところが大きいと認識した。

ロシアはもっとも開花の遅れた国であり、皇帝や貴族だけが繁華奢侈を享受していて、一般の人民は極めて貧しい奴隷のような生活をしていることを知った。

総体的に言えば、日本への差し迫った侵略の危険はないと思った。最強の英仏にしても後進の米独にしても、貿易の利を求めてはいても、それ以上ではなく、最も恐れていたロシアも開花の遅れた状況からして、当面、それほど恐怖する相手ではないと感じたようだ。

(5) 西洋と東洋の文明比較

世界中どこへ行っても、誰もが富は欲しい。豊かになりたいと思う。しかし、東洋では、富を求める目的が、「自家の生活を全うする」のに対し、西洋では「快樂の生活を極める」にある。つまり、東洋では、「足るを知る」の精神で、ある程度食べられれば生活できると考えるが、西洋では、快樂をとめどなく追及する。その結果、貧富の差が激しくなる。

その結果、政治面も、「西洋では保護の政治をし、東洋は道德の政治をなす」と、随行者の久米邦武は、感じたようだ。

(6) 国体について

共和制か、君主制か、立憲君主制か。アメリカは共和制だが、もともと王様はいないし、法王もない。移民が作った国であり、皆で政府を作るしかなかった国で、日本とは成り立ちが違う。

フランスも共和制だが、帝政と共和制を6回も行き来している。スイスも共和制だが、サイズが小さいから可能であり、あまり参考にならない。

訪問国のうち、9カ国が何らかの形で君主制だった。英国は、女王がいて、貴族がいて、議会がある複雑な組織である。しかし、英国は憲法がきちんとしておらず、分かりにくいところがあった。

欧州の小国群、すなわちベルギー、オランダ、デンマーク、スウェーデン、スイスなどが、大国の間であってしっかり独立を維持していることは、大変励みになった。それは、植民地となってしまったアジアの弱小国との対比において、特に鮮明な印象を与えたようだ。

経済的な繁栄を築くには、一つのことだけではだめで、関連する諸要因がすべて完備されることが必要で、交通・通信機関は勿論、国際的な商業、貿易が大きな役割を果たしていること。科学的実学と普通教育の重要性である。

日本の遅れは、わずか40年である。今から40年前は、ヨーロッパには汽車もなく、海を走る汽船もなく、電信で情報を伝えるすべもなく、運河で小舟を引っ張り、風任せの帆船で海を渡り、馬車を走らせていた。

それが大きく変化したのは産業革命以降であり、そのつもりで努力してゆけば40年前後で追いつくことも可能ではないか、と思った。

この長期研修視察旅行の成果として、そのように感じたのではないかな。

6. 使節団の留守中の日本

(1) 主要メンバー

留守政府の主要メンバーは、三条実美、西郷隆盛、板垣退助、大隈重信、そして各省の実務担当者は、大隈、井上薫、山県有朋、江藤新平など。

三条、西郷、板垣は、実務には疎く、実際の仕事は、大隈、井上、山県、江藤などが中心。

(2) 岩倉使節団留守中の日本の動き

1871 (明治4年) 11月、岩倉使節団出発

1872 (明治5年) 2月、土地永代売買の禁を解く

5月、明治天皇、四国巡幸に出発、西郷隆盛も随行

6月、明治天皇、鹿児島着、島津久光が建言書提出

7月、全国に郵便施行

8月、学制を制定し、学区を布く

9月、新橋・横浜間に鉄道開通

10月、官営富岡製紙工場が開業

12月、改暦、12月3日を明治6年1月1日とする

1873 (明治6年) 1月、徴兵令を布告

4月、内閣改造、旧肥前・土佐勢の勢力伸長

井上薫、大蔵大輔を辞任

7月、地租改正条例を布告

8月、閣議で西郷隆盛の朝鮮派遣を決定

9月、岩倉使節団帰国

(3) 朝鮮問題

朝鮮は大元君という前近代的保守家が支配していて、国交を求める日本に対し、「みだりに欧米化し、禽獣に等しい国」と批判し、それを改めない限り付き合わない、といつてきた。

そこで、「こんな無礼な話はない、使節を派遣して説得しよう」ということになった。

西郷隆盛は、平和的に非武装で交渉しようという立場、板垣退助らは、威嚇戦法で説得しようという立場。結局、西郷をその使節に当てようということになった。

7. 岩倉使節団帰国後の日本

1873 (明治6年) 10月14日、閣議で大久保が遣韓に反対。西郷と激論

10月15日、閣議で西郷遣韓の議決定

10月23日、遣韓の議、白紙撤回

1874 (明治7年) 1月、板垣退助らが「民撰議院設立の建白書」提出

2月、江藤新平らが挙兵、佐賀の乱起こる

5 月、台湾に出兵。その後、清との交渉で琉球帰属問題解決
1876（明治 9 年） 2 月、日朝修好条約調印
10 月、熊本神風連の乱、秋月の乱、萩の乱が勃発
1877（明治 10 年） 2 月、西南戦争起こる
5 月、木戸孝允没（45 歳）
9 月、西郷隆盛自刃（51 歳）、西南戦争終結
1878（明治 11 年） 5 月、大久保利通、東京紀尾井坂で暗殺（49 歳）
1881（明治 14 年） 10 月、明治 23 年を期し、国会開設する旨の詔勅
1882（明治 15 年） 2 月、伊藤博文、憲法調査のため渡欧、翌年 8 月に帰国
1883（明治 16 年） 7 月、岩倉具視没（59 歳）
1885（明治 18 年） 12 月、伊藤内閣成立
1889（明治 22 年） 2 月、大日本帝国憲法公布
1890（明治 23 年） 7 月、第一回衆議院総選挙
11 月、第一帝国議会招集

8. 大久保と伊藤のその後の動向

帰国後、大久保は日本を独立した国にするには富国強兵が重要だが、それを実現するためには殖産興業の重要性が大事で、それは、決して一足飛びに行くものではなく、着実に、漸進的に発達を図らなければならない、と考えた。1 年半に及ぶ洋行の経験は、大久保の考えを大きく変えた。

一方、西郷は、旧藩主島津久光の廃藩置県批判に振り回され、東京と鹿児島の間を往復するばかりで、相変わらず物質文明より、道義的な文明を理想と考えるなど、洋行組と国内滞在組の両者の考え方は大きく違ってきた。

しかし、西郷は、明治 10 年、西南戦争で自刃、大久保は、明治 11 年に 6 人の不平士族によって暗殺された。

伊藤は、憲法調査のため、明治 15 年、ヨーロッパに出発。1 年半も留守にしたが、岩倉の後ろ立てと、山県に後事を託し、十分に勉強することができた。帰国すると、憲法について伊藤にかなうものはいなく、華族制度、内閣制度を次々と作り、憲法作成への地ならしをした。そうして作ったのが日本独自の天皇制国家という構想である。

明治 18 年、内閣が成立し、伊藤がわが国最初の総理大臣となった。

（参考文献）「堂々たる日本人」 泉三郎著 祥伝社
「英傑の日本史」 井沢元彦著 KADOKAWA